

2003/9/23 (火)

大「子」の 窓から

中村祐司

大学はまだ夏休み。蜘蛛くもの子を散らすように学生たちの姿がキャンパスから消えたままだ。正直な話、寂しいというよりもようやく静寂が訪れほつとす。仕事柄、20歳前後の学生と日々向きあうことで、精神的な元気をもらい、それが格好の「若返り薬」となっている。

同時に年の差が年々開いていく若者と同じ土俵に立ち続けることで、どつと疲れが出ることも事実である。同僚にも、静寂に包まれるキャンパス風景に身

6

静寂な構内に「ホッ」

を置くことを楽しみにしている者は、意外に多い。

ところで、この夏、韓国光州にある国立全南大学ちよんなんだを訪れる機会があり、広大なキャンパスを一回りした。対照的に多くの学生の姿が目についた。ジャズダンスや合唱、サッカーやバスケットなどに興じ、周囲700坪、800坪はあろう大きな池の回りにあるベンチに座って談笑していた。思い思いに散策している家族連れや市民もいた。

キャンパスが中心市街地における「オアシス」となっているのである。このように、休日にも人々が気軽に集まってくるような環境を大学が提供していくことも必要かもしれない。

(宇都宮大学国際学部教授)